

巻 頭 言

学術研究活動は、医療の質向上に繋がる

院長 平岡 眞寛

2016年4月に日本赤十字社和歌山医療センター（以下：当センター）に赴任しました。大学病院以外で勤務したことが無いという「大学オタク」として、多様かつ重要な機能を数多く担っている当センター管理職である院長の素養として適正とは言い難く皆さんに迷惑をお掛けしたと思います。

その一方で、学術研究は長年手がけてきた領域であり、少しでもその経験が役立てないかと着任当初から思っていました。着任した初めての日本赤十字社和歌山医療センター医学雑誌（以下：当誌）の巻頭言のタイトルは、「学術活動の強化に向けて」であり、私の決意表明のような内容になっています。そこでは、「昨年4月の院長就任以来、中期の大目標に病院の存在感（病院力）を高めることを掲げている。学術研究活動は、即効性は高いとは言えないが時間とともに着実に病院力を大きく向上させる」と述べています。これが原点です。

その当時、当センターには学術研究に関する財産が3つあることは大きな支えになりました。まず第1は、1882年創刊という40年の歴史を有する当誌の存在です。古いだけでなく、質にもこだわっています。表紙の右肩にISSN 1341-9927という表示がありますが、ISSNはInternational Standard Serial Numberの略であり、国際的に刊行物を識別するために申請付与されるものです。また、国内最大級の医学文献情報データベースである医学中央雑誌にも収録されています。第2は西館4階にある病院図書室です。決して広くはありませんが中身は充実しています。収納している医学雑誌は国内外で評価を得ている臨床系雑誌を網羅し、書籍あるいはUp To Dateなど活用度の高い二次情報誌も整備されています。第3は「日赤和歌山ルネサンス」という院内の学術集会です。個人の独創的な発想に基づく研究、チーム医療に関する医療の向上に直結する研究などすべての職種が参加する中身の濃い集会です。

学術研究活動の強化・支援策として最初に取り組んだのが、文科省の科学研究費（科研費）に申請できる資格獲得でした。学術研究活動を行うための研究費獲得ということに加えて、科研費を申請できる市中病院は極めて限られており、資格獲得そのものに大きな意義があると考えました。2017年9月に承認され、その年から毎年一件以上が採択されているという特記すべき実績を挙げています。

次いで、CLiP（京都大学医学部附属病院 臨床研究教育・研修部における医療者のための臨床研究遠隔学習プログラム）受講への支援を行いました。この1年間のコースでは、臨床研究に必須となる生物統計の系統だった教育を行います。この5年間で40名が履修を終了し、10名が受講中です。CLiP修了生が当センターの各部署で臨床研究の推進役の一翼を既に担っていますが、更に発展することを期待しています。

注力したが道半ばであるものがいくつかあります。全国展開を図る医療情報ネットワーク組織との連携より、当センターが誇る豊富な診療データを活用した研究への展開には、まだ時間がかかりそうである。また、臨床治験、臨床共同研究の実績は、当センターの診療実績、充実したスタッフを鑑みれば、物足りないと言わざるを得ません。第1,2相の本格的な臨床治験、あるいは共同研究が、最近増えてきたのは喜ばしいと考えます。本格的な臨床治験センター、更には臨床研究全体を推進する臨床研究センターの実現は、将来に託したいと存じます。

最後になりましたが、2021年度当誌に貴重な総説、原著論文をご投稿いただいた皆様と編集の労をお取りいただいた学術委員会、研修課の皆様に深謝します。